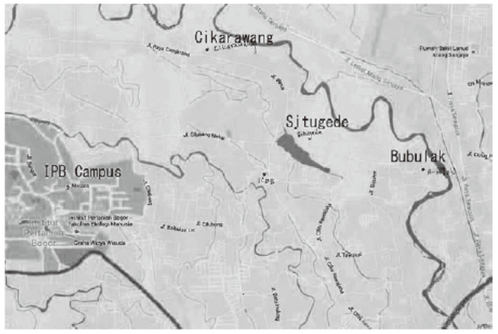
■Bogor（ボゴール）サイト

ボゴールサイト担当教員
香川大学特命教授
田島　茂行

ボゴール（Bogor）サイトは、首都ジャカルタから電車で１時間、車でも３時間程度の距離にあるボゴール市近郊にある。左図に示すようにボゴール農業大学（IPB）の主要キャンパスであるドラマガキャンパスに隣接して、活動場所である人口数千人規模のシトゲデ町（Situgede）チカラワン町（Cikarawang）（2013年度より活動）及びブブラック町（Bubulak：2015年度より活動）がある。IPBキャンパスからバイクで10分程度の距離に全ての活動拠点があり、IPB-SUIJI参加学生が講義の合間に活動に参加でき、IPB教員もほぼ毎日活動場所へ来訪していただけた。各活動場所では日本学生３名程度、IPB学生８名程度の単位で地域活動家の家に分宿し賄いを提供された。特定教員は毎日バイクで３カ所の活動場所を廻って点検し、安全管理した。



シトゲデ町はシトゲデ湖周辺で急速に人口を増やしている観光住宅地で、住宅ゴミ問題、湖の汚染等の問題を抱えている。シトゲデ地区で特徴的な活動はプラスチックゴミを再利用したオリゴミづくり、シトゲデ湖周辺のゴミ掃除等であった。チカラワン町は近郊農業地帯で、ほぼ農民で構成されサツマイモや高値で売れるクリスタルグアバの栽培、サツマイモ粉生産工場と６次産業化をねらった試みを行っていた。ブブラック町は2015年度からSUIJI活動を開始した地区であり、新規に開発された都市住民集落である。集落のゴミ問題を解決するために、政府から資金を得てバイオガス生産プラントを立ち上げており、過去のSUIJI学生が発足に当たって貢献した「ゴミ銀行」が機能していたこともあり、SUIJI学生が連携して活動した。ボゴールサイトは、2015年度から活動場所が３カ所となりながらも、距離的に近いので合同の企画を発案して毎年実施した。2013年度はシトゲデ湖周辺に環境維持啓蒙看板の作成と設置、2014年度は小学校でゴミ運動会、2015年度は農業体験、ゴミ運動会、学校訪問などをボゴールサイト全体の企画として実施した。本サイトは農村とは言いながら大学近郊であり、最終振り返り等で遠距離移動する必要が無く、プログラムを多く企画実施できた。

2013年シトゲデ町役場で町長にSUIJI活動への協力を了承してもらい、記念写真を撮った。

他者と向き合い気づけた自分

愛媛大学　法文学部　総合政策学科　司法履修コース
三浦　祐子
Bogorサイト（平成27年度、平成28年度）

私のSUIJIサービスラーニング・プログラムへの参加の動機は、泊まり込みで他大学の学生や海外の人と一緒に活動する、という内容に興味をもったことだ。このような経験は他の実習や活動ではなかなかできることではないため、大学に入って何か新しいことをしたいと思っていた私にはとても魅力的だった。また、自分の地元も過疎化の一途をたどっているため、他の地域では、どのような取り組みがなされているのか、ということも知りたいと思った。

活動の中で最も印象に残ったのは、インドネシア学生との文化の違いだ。１日に５回のお祈りや食事に関する制約など、宗教の違いもそうだが、着眼点や、発想の方向性の違いにも文化やバックグラウンドの違いを感じた。特に、時間に対する考え方やそれに伴う行動は、日本人側とインドネシア人側とで大きく異なり、正直なところ、苦労もした。

私にとってSUIJIは、人との出会いやつながりを通して、自分はどんな人間かを気づかせてくれるきっかけであり、成長させてくれる存在だ。サイトのメンバーや地域の方々と接する中で、自分の普段は表に出さない面、知らなかった面を知ることができた。また、周囲に対して、何ができるのか、どんなことが向いているのか、ということを知ることもできた。また、苦楽を共に分かち合うことで、かけがえのない仲間を得ることもできた。確かに大変なこと、辛いと思うこともある。しかし、それ以上に感じる、一つのことを成し終えたという実感や達成感は本当に価値のあるものであると思う。

国際協力への入門

香川大学　農学部　応用生物科学科　環境科学コース
花崎　友彦
Bogorサイト（平成26年度、平成27年度）

私がSUIJIプログラムに参加した理由は、友達に誘われたからだ。インドネシアに安く行けて、外国人とコミュニケーションができるなら行ってみようかな、と思い参加した。参加前には、この経験が自分の大学生活に大きな意味を与えるとは想像していなかった。

私が活動したチカラワン村は農業を軸とした村である。特にクリスタルグァバ栽培がメインで、地理と気候を利用した近郊型多角的農業が発達している。熱帯モンスーン気候下で行う独特の農業手法について学ぶ一方、乾季の深刻な水不足を目の当たりにした。今年訪れた際は乾季が長引いたため、農産物の多くは例年の半分にも満たない出荷量であった。それに加え、急な豪雨による川やため池の氾濫が起こり稲などの作物だけでなく村人の住居にまで被害が及んでいた。これらの光景は大変衝撃的であった。

今僕は、将来アジア地域を中心とした急速に人口が増加している国々の水環境を整え、食料の持続的供給に貢献したいと思っている。今後グローバルな視点と問題発見・解決能力、コミュニケーション能力を身に付け、今自分が学んでいる農学分野(水環境科学)の知識を世界の食糧問題・気候変動などの開発課題の解決に貢献できる力を付けていきたい。現地の人々が納得できる援助事業を推進する「think globally, act locally」という幅広い教養と現地の人々の中に入り込んでいけるコミュニケーション能力、そしてそれらの問題を解決する能力を自分の中に構築していきたい。

ボゴールサイトの重要テーマはゴミ問題であった。左の写真は地域婦人会が作成しているプラスチックゴミを再利用した装飾品で、オリゴミと命名し学生も作成に協力した。右の写真はブブラック地区で活動しているゴミ銀行の様子である。再利用できるプラスチックゴミを分別し、業者に引き取ってもらい収入とするための処理を学生がしている様子である。

「おりごみ」の活動

地元の小学校訪問。学生による防災教育やゴミ分別のお話

ジャカルタにて、現地在住の黒田さんと一緒に。海外SL初年度の貴重な1枚。

上の写真は３活動グループ合同でゴミ分別収集の啓蒙教育を小学校で行った時のものである。ゴミ運動会と銘打ち、趣旨を説明し、ゴミ回収の誓いを皆で唱和後、学校周りの清掃を一斉に行い、優秀なグループには賞品を渡した。

右の写真は地域の清掃をSUIJI学生全員で行ったもので、特に金曜日朝はモスク周辺も掃除し、住民に感謝された。

ボゴール地区は近郊農業地帯であり、高付加価値の野菜・果物や商品作物が栽培されていた。学生は農民と一緒に農業活動にも参加し、産業としての問題点を学んだ。

左上の写真は野菜栽培畑で長時間・手作業の草抜きをしている様子である。

左下の写真はサツマイモ粉を作るため、サツマイモの皮むきを手作業でしている様子である。労働生産性向上のために機械の導入を学生は考えたが、村人口の２割程度いる無職の若者に労賃を提供するために手作業部分を残しておく事が村では重要であることを教えられていた。

■Tegal（トゥガル）サイト

中ジャワ州トゥガル県は、西ジャワ州に位置するボゴール農業大学から東に約360㎞、車で約10時間の位置にある。サービスラーニングのサイトとなったのは、トゥガル県南部スラマット山麓のボジョン郡である。スラマット山は標高3,428m、ジャワ島で第二の高さを誇り、山麓一帯は水が豊富で、土壌が肥沃なほか、温泉が観光資源となっている。

ボジョン郡の人々の生業の柱は農業である。人参、キャベツ、トマト、唐辛子、ネギ、赤ワケギ、ニンニク、玉ねぎなど様々な野菜が年間を通して栽培されている。20年ほど前は、ボジョン郡はインドネシア第一のニンニク生産地として知られていた。しかし、連作に次ぐ連作により土壌の疲弊を招き、安価な輸入ニンニクとの競争に負け、農家に大きな損害をもたらした。今では、ニンニクを再び栽培しようとする農家はほとんどいない。

トゥガルでのSUIJIサービスラーニングは、ボゴール農業大学の研究・社会貢献機構（略称LPPM-IPB）が実施する「IPB Goes To Field国際プログラム（略称IGTF）」の一環として実施された。IGTFは、ボゴール農業大学の学生による社会貢献活動で、単位を伴わない自主プログラムとして位置づけられる。トゥガルサイトは、異なる特徴をもつボジョン村、カランムルヤ村、トゥエル村、スニアルセー村の４村で構成される。

毎年、日本３大学からの学生約12人と、ボゴール農業大学の学生約12人が、各村にわかれて活動した。ボゴール農業大学からの参加学生は、日本での国内SLにすでに参加経験のある学生と、翌年以降の国内SLに参加予定の学生からなる。学生たちは、それぞれ離れた４村に滞在するが、３日に１回程度集まり、各村での活動の進捗や以降の計画を議論し合った。

学生の活動は、滞在する地域の観察と、多様な年齢層の地域の人々へのインタビューから始まる。活動当初はゴミや健康管理など住民の衛生と保健問題に学生の関心の多く集まる。しかし学生たちは徐々に地元の可能性を掘り起こしていく。例えばボジョン村のイスラムの初等中等教育システム、カランムルヤ村の混植、トゥエル村のゴミ銀行設立に向けた住民協力、トラコ（甘い干しトマト）作り、スニアルセー村の世帯毎の自主的なゴミ処理などである。また、学生たちは、幼稚園、イスラム寄宿塾、孤児院、婦人会や農民グループの会合などを訪れ、日本食や文化紹介、各村で実施している活動紹介などを行った。

トゥガルサイトで特筆すべき点は、参加した日本学生の数名がサイト活動中の発見を深めてテーマとし、「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」を通して１年間のインドネシア留学を果たしたことだ。また、トゥガル県政府はSUIJIサービスラーニングを契機として、ボゴール農業大学と協働し、地元の農業の知恵を掘り起こす活動をボジョン郡の小・中・高校の人格形成教育の一環として取り組む予定である。

トゥガルにまみれて

高知大学　農学部　農学科　暖地農学コース
佐々木　周
Tegalサイト（平成27年度、平成28年度）

私は平成27年度の２月から３月にかけて海外SLに参加し、トゥガルサイトのトゥエル村に滞在した。国内SL（高川サイト）での活動をきっかけとして、インドネシア人と交流することの楽しさを実感し、英語でコミュニケーションを取る中でインドネシアの農山村に興味が湧き参加することを決めた。サイトに入ってすぐに道ばたや川にとても多くのゴミが捨てられているのを発見し、川からは悪臭がすることに驚いた。そのような村での活動でとても印象に残っているのはゴミ問題を解決しようと日々活動を続ける住民の方々がいるということである。事前情報でゴミ問題が多く、その問題に住民は見向きもしないということを学んでいたが、私の訪れたトゥエル村ではゴミ銀行でのゴミの分別活動が盛んに行われており、ゴミ銀行の代表の方は村をきれいにしたいという熱い思いを語ってくださった。地域の子供たちに環境教育なども行い、周りの住民をどうにかして巻き込みながら環境問題を解決しようとする住民との活動を通して、環境問題を解決する方法や環境を守ることについて考えさせられた。SUIJIに参加したことによって、国内外に関わらず地域の課題を解決することの難しさを実感した。また、さらに農山漁村やインドネシアが好きになり、留学生と交流するなど活発に活動するようになった。

新しきを取り入れる･自分を変える

香川大学　農学部　応用生物科学科　応用生命科学コース
森本　貴行
Tegalサイト（平成26年度、平成27年度）

参加した動機は、１回目は、海外に行く良いきっかけになり、現地の人と深く交流できると考えたからである。２回目は、活動の結果が気になったことと、やりたいことが出来たためである。

サイトでの活動の中で、一番興味深かったのは、農村であるが故に、良くも悪くも村人同士の輪が強く、自分たちは「外から来た人」となると思っていたが、逆に、村を周っている時や訪問した時にとても暖かく迎え入れてくださったことである。その時、その村には、訪れてくれた人が幸運も一緒に持ってくるからしっかりともてなす、という風習があるということを知り、その考え方に驚いた。地域としてのそのような考え方は初めて聞いたため、言葉や宗教の違いとはまた別の文化・風習の違いを、現実味を持って認識するきっかけとなった。

村では、新しくモノが入ってきても習慣などは以前のまま、という部分が見受けられ、それが顕著に表れた部分がゴミ問題だった。プラスチックごみを今までの生ごみと同じように捨てて山のようになっている。対して、新しいモノが入ってきて変わったものが、ニンニクである。中国産のものに押され生産量がかなり落ちている。これらのことから、新しく何かを取り入れるときにはそのことをよく知り、自分も状況に合わせて変わっていく必要がある、とまざまざと思い知った。
今後やっていくこととして、自分はこのことを意識して実践していこうと思う。

トマト農家さんと交流【トゥエル村】

村でのお菓子作り見学【トゥエル村】

小学校訪問。折り紙を通じた文化交流【トゥエル村】

子どもたち向けのおにぎり試食会【スニアルシ村】

最終発表後、トゥガル県政府と記念写真

中学校訪問。喫煙の健康への影響を説明する【ボジョン村】

子供たちがうどんを試食

ゴミ銀行のシステムを学ぶ【トゥエル村】

幼稚園で園児とともに絵を描く【トゥエル村】

水源地でゴミ拾い【スニアルシ村】

4村で活動している学生が集まり、活動の進捗と計画を議論する。

■Bantul（バントゥル）サイト

Bantulサイトのメンバーが活動するBantul県は、インドネシアの第２の都市ジョグジャカルタ特別州内にある県の１つで、平成18年震災で大きな被害を受けた地域である。学生が活動してきたのはPetir地区で、“Petir”とは、現地の言葉で“雷”や“雷鳴”を意味する言葉である。谷に位置する地区で、雨季にもなると落雷を伴う激しい雨が降るところである。この地区の主要な産業は、稲作とサトウキビの栽培である。

学生はこの村の４つの家庭に分かれてホームステイをし、活動を行ってきた。村の中心を走る１本の道の両脇から小道が枝分かれしており、学生は「ジャランジャラン（散策）」で、どんどん村の中に入っていく。この地域にはインドネシアの「ベストファーマー10人」のうちの１人に選ばれた方がいて、農業が盛んに行われている。この他、この地域の産業形態の特徴として、小規模でウズラを飼っていたり、バイオガスを営んでいたり、魚の養殖を行っていたりする。１世帯が家庭規模・小規模で複数の取り組みを同時に動かしており、学生、特に農学部の学生には興味を引く１次産業のあり方を知ることができる。

この村には小学校があり、学生が訪問させていただくと人懐っこい子供たちが教室から飛び出してきて鬼ごっこが始まる。学生たちはこの小学校で環境教育の一環として、ごみのポイ捨てをやめるように促したり、「ごみの分別」をすることを伝えたりしてきた。習慣の違うインドネシアで、どうすれば相手に（子どもに）伝わるのか、そして継続的な活動へとつながるのか、学生たちは奮闘しながら活動を展開していった。

夢に向かって成長できたプログラム

愛媛大学　教育学部　国際理解教育コース
西岡　彩音
Bantulサイト（平成27年度、平成28年度）

私は愛媛大学教育学部国際理解教育コースに所属しています。入学当初から海外に行き、経験を積みたいと考えていました。その時にSUIJIに出会い、インドネシアの大学生と英語でコミュニケーションを取りながら活動する点、また世界について考え、地域で行動するというグローカリゼーションに魅かれ、参加を決めました。私は将来教師を目指しているため、ここでの経験は必ず、将来役立つと思ったことも動機の１つです。

平成28年２月に初めてバントゥルを訪れました。私がバントゥルサイトで活動する中で最も印象的だったのは、子どもたちとの出会いです。私たちが活動したスリマルタニ村には小学校が１つあり、たくさんの子どもたちが元気に過ごしています。私たちが訪れると、子どもたちは飛んでくる勢いで周りを囲み、満面の笑顔で握手してくれます。実際子どもたちとは言葉を使ったコミュニケーションは取れませんが、絵を書いたり、鬼ごっこをしたり、簡単な単語を使って、一緒に時間を過ごすことができます。そういった時間が私にとって、一番幸せな時間です。「次回、訪問するときには子どもたちの夢を聞き、一緒に将来について考える時間を取りたい!」と思いました。

海外SLに参加して、自分の考え方の変化を強く感じています。以前は、仲間の様々な意見を聞くことで満足していたのが、徐々にもっと好奇心をもっていろんなことを知りたい・話したい、自分の分野をもっと深めたい、将来について・地域について・専門についてしっかり考えたいと思うようになりました。

笑ってもっとBaby

愛媛大学　法文学部　総合政策学科　グローバル･スタディーズ特別履修コース
貞弘　翔哉
Bantulサイト（平成26年度、平成27年度）

私が海外SLPに参加した理由は、国内SLPに参加していたインドネシア学生にもう一度会いたいという理由からだ。勿論、インドネシアという国に興味もあったが、それよりも、彼らの言いようのない人間性に惹かれ渡航を決意した。

インドネシアでの暮らしは、日本とは全く違った。その違いにうんざりすることもあったが、一方で感心するところも多かった。特に、彼らの精神的な部分にである。

SUIJIを通して私がインドネシア人から学んだことは、“笑うこと”だ。活動中、行き詰まったり、辛くなったり、喧嘩したりすることは日常茶飯事である。しかし、彼らはよくも悪くもいつも楽観的で、「It’s OK, It’s OK」（大丈夫、大丈夫）と笑い飛ばす。あるインドネシア人に、“Happyでいることはマナーだよ。あなたが落ち込んでいると、一緒にいる相手まで暗い気持ちになっちゃう。それって相手に失礼じゃない？”と言われたことがある。まさにその通りであり、インドネシア人の生き方を象徴する素敵な考え方である。

私はホームステイ先の生活で、日本との生活水準の違いに驚いた。しかし、彼らはいつも笑っている、よくも悪くもあまり思い悩んでいないように思えた。そのなかで、人の喜びや幸せとは何かについて考えさせられた。彼らを見ていると、極々小さな単位での幸せは、“人と話すこと”そして“笑うこと”ではないかと感じた。インドネシアでの生活は、生きていく上で何を大切にすべきかを教えてくれた。

インドネシアの小学校で折り紙を教える学生（平成25年度）

地元の小学校にて実施した防災教育（平成25年度）

バイオガスファーム、燃料確保!? 牛舎のお手伝い（平成26年度）

地元の幼稚園を訪問（平成26年度）

地元の小学校で「兜」を作成（平成26年度）

ゴミ箱を小学校に寄贈（平成27年度）

農作業を手作業で（平成27年度）

村長にヒアリング調査（平成27年度）

■Gunung Kidul（グヌン・キドゥル）サイト

グヌン・キドゥル県は古都ジョグジャカルタの南東に位置する。石灰岩地質の山地が広がり、南部はインド洋に面している。グヌン・キドゥル県から東に続く沿岸地域は、その特徴ある地形・地質から、ユネスコの世界ジオパークにも認定されている。サービス・ラーニングのサイトは、内陸域の西端に位置するバニソチャ（Banyusoca）村である。村の中心部には村役場、小学校、商店が並び、数十人が雨宿りできるほどの大きな木が枝葉を広げている。

村の人口は5,700人あまり（約1,860世帯）で、８つの区で構成されおり、サービス・ラーニングでは、このうちクタンギ（Ketangni）区とゲダッド（Gedad）区に滞在した。村は石灰質土壌のやせた大地の上に位置するため、かつては水を得るのに苦労し、地中に伸びる洞窟の中から水を汲み出していた。現在では川からポンプで水を引き、各家には水道が整備されている。

村人の主たる生計手段は農業で、トゥンパン・サリ（Tumpang Sari）とよばれる特徴ある農法が営まれ、一つの畑に陸稲、マメ、トウモロコシ、キャッサバなどの複数種の作物が列状に混作されている。また、チークの植林も盛んで、林床では野菜が混作されている。多くの世帯でヤギや牛が飼われており、村びとはそのエサとなる草を刈りとり、背中いっぱいに背負いながら道を行き交う姿がよく見られる。その他にも農業を中心に養鶏やナマズの養殖、ヤシ砂糖やテンペの製造、木工品制作といった小さな地場産業が営まれている。

現地では、地域を知るために村びとにインタビューをしながら情報を収集するとともに、日本食を通じた交流会を開いた。また、自然を活かした観光化を目指すという村長からの依頼を受けて、村の見どころを紹介するマップを作成するとともに、小学校や幼稚園でゴミ教育を行った。そのほかには、この地域特有の農法やそこで用いられている肥料、農作物の流通について調べたり、大規模に進められているチークの一斉造林が生態系に与える影響を懸念し、学生という立場から疑問を投げかけたりしている。

トゥンパン-サリによる混作畑

グローバルになる一歩目

香川大学　農学部　応用生物科学科　食品科学コース
小池　裕之
Gunung Kidulサイト（平成27年度、平成28年度）

SUIJIに参加する前までは日本語でしかコミュニケーションをとっていなかったので、海外の人と英語でコミュニケーションをとってみたかったからである。自分の英語での読解力、聞く力、話す力がどれだけ通用するのかを試してみたかった。

次に、インドネシアの中の５つのサイト中で最も都会から離れているというところが私の好奇心をそそった。日本での暮らしとインドネシアでの暮らしをこの目で確かめたいと思ったからである。

Gunung Kidulでは様々な驚きがあった。私はホストファミリーの家に泊めてもらい約10日滞在した。その中で、私は食べ物についての驚きが多々あった。インドネシアという環境では気候、宗教、地理的要因で日本とは違う点があった。例えば、インドネシアの雨季は湿度が非常に高いので食べ物は腐りやすいため、ほとんどの料理が油で表面をコーティングしてあった。イスラム教の人が多いため主食には大体米か魚で豚肉はもちろん、田舎の方では食用肉があまりなかった。また、４年間続いているためか現地の人も日本学生のことを覚えていただいて、歓迎されたことについても驚いた。驚きというのは反省・課題改善に直結すると私は思う。

海外SL参加は、英語学習を頑張ろうという動機になった。参加前後でのこの気持ちは格段に違うものとなった。またグローバル化している社会に参加する第一歩にもなった。

挑戦から学んだこと

愛媛大学大学院　農学研究科　食料生産学専攻　農業生産学コース
仲戸　文音
Gunung Kidulサイト（平成25年度、平成26年度）

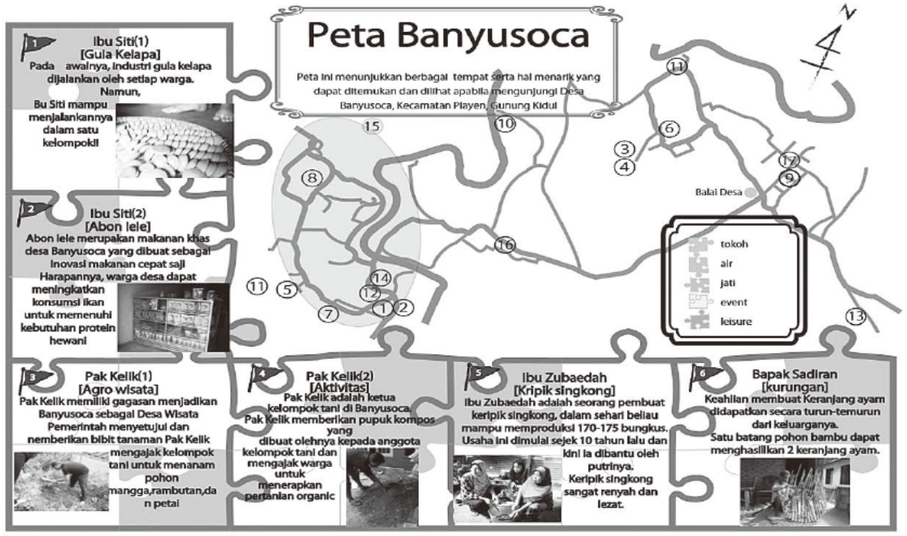
私は、大学１年生の時に初めて知り合った留学生がインドネシアからの留学生で、そのころからずっとインドネシアに一度は行ってみたいという気持ちがあった。また、海外SLの前に国内SL等にも参加しており、日本の農山漁村にも興味を持ったため、インドネシアの農山漁村も見て知りたいと思ったので、このプログラムへの参加を決めた。

私は、インドネシア語でTumpang Sariと呼ばれる混植の技術が一番印象に残った。トウモロコシとイネ（陸稲）とピーナッツとキャッサバとウシのエサが同じ圃場に植えてある様子は不思議だったが、一か所が気候などの関係で不作でも様々な作物が植えてあるため収入が得られるような仕組みになっていること、地力が低下しにくいことなどの理由を聞くと納得した。畦にもトウモロコシやキャッサバを柵のようにして植えてあり、土地利用に無駄がなかった。また、トウモロコシの収穫方法として，可食部を収穫する前に茎の上部を先に収穫して家畜のエサにしたり、残りの部分は圃場で燃やして肥料にしたりと収穫方法1つでも多くの工夫があった。家畜の糞は有機肥料として用いられ、人間の食べた果物の皮などの生ごみは家畜のエサとなっていた。このように、人々の生活の中には循環が見られ、そこに魅力を感じた。

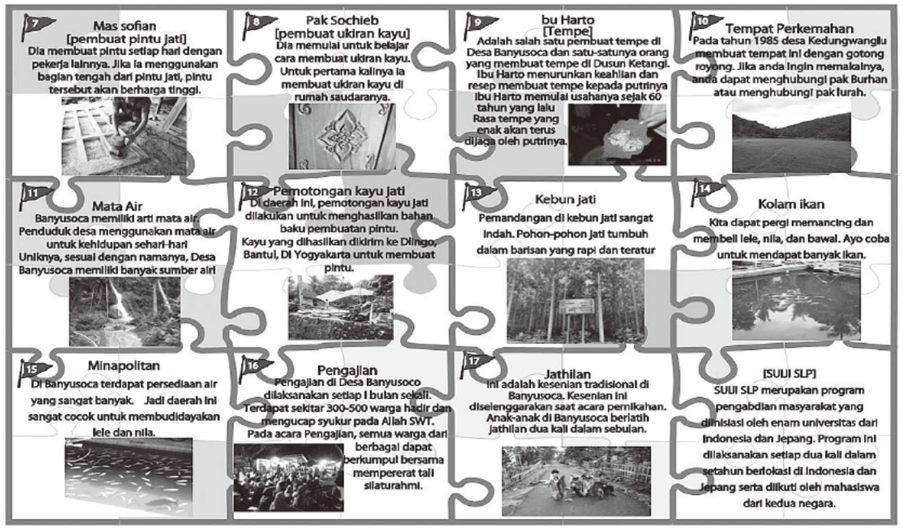
私は、SUIJI海外SLに参加して、これまで実行に移せていなかった留学を実現することができ、大学生活が想像以上に充実したものとなった。未知の世界に飛び込む勇気や楽しさを学べたこのプログラムのおかげで、今後も積極的に新しい挑戦をしていけると考える。

習字で文化交流

トウモロコシの実をはずす



表



裏

村の見所を紹介したマップ（平成27年度）

現地で開催した「ジャパン・フェスタ」の後で撮った集合写真（平成25年度）

訪問した小学校で。この小学校では防災教育を実施（平成25年度）

チーク苗を栽培している農場を見学。作業の手伝い（平成25年度）

地元の子供たちに「あやとり」を教える（平成26年度）

村内を散策（平成26年度）

家畜のエサとなる草を運ぶ村びとと（平成26年度）

ホームスティ先でのミーティング（平成27年度）

小学校人形劇でごみ教育（平成27年度）

■Spermonde（スプルモンデ）サイト

インドネシア・スラウェシ島の南部に、古くから交易の要衝として栄え、現在も東部インドネシア地域の経済・交通の中心都市であるマカッサルがある。そのマカッサル市の沖合に、隆起サンゴ礁からなる、百数十もの島々が点在している。スプルモンデ諸島である。ハサヌディン大学との連携の下、実施した海外サービスラーニングは、スプルモンデ諸島の中の一つ、バランロンポ島が主なサイトとなった。

バランロンポ島は、マカッサル市から約20キロ、定期連絡船に乗って約１時間の沖合にある。ソラマメのような形をした面積５haほどの島に、4,000人以上の人々が暮らしている。人口密度は東京都区内よりも高い。砂地に家屋がぎっしりと立ち並んだ島内には、ココヤシ、タネナシパンノキ、ワサビノキなどは育つが、田畑はない。米をはじめ、主な食料品はマカッサルなどから船で運び込まれる。島民の主な生業は、ナマコ漁や周辺海域での漁、そして食料品・日用品の小売商などである。

バランロンポ島は、行政上はマカッサル市ウジュンタナ郡バランロンポ町と位置付けられ、島内には町役場、保健センターの他、小学校が２校、中学校と高校が各１校ある。島民のほとんどはマカッサル、マンダール、ブギスなど南スラウェシの主要民族からなり、イスラムを信仰している。ナマコの潜水夫としてフローレス島などからやってきた人の中には一部カトリック教徒もいる。また、島の中心部には、海洋研究の拠点として、ハサヌディン大学海洋ステーションが設置されている。

SUIJIサービスラーニングは、ハサヌディン大学では学部卒業に不可欠な必修科目KKN（農村貢献型実習）の国際プログラムとして位置づけられている。国際KKNプログラムを選んだ学生は、日本とインドネシアで実施されるサービスラーニングの両方を履修しなければならない。スプルモンデ・サイトには、毎年、夏に四国でのサービスラーニングを経験したハサヌディン大学の学生（13～14名）と日本３大学からの学生10～15名が参加した。約10日間のサイト期間中は、大学の海洋ステーションを滞在・活動の拠点とし、３～４泊程度は、数軒の島民宅にわかれてのホームステイを組み入れた。

期間中は、学生たちは時間があれば、「ジャランジャラン」（インドネシア語で散歩の意）に出かけていった。島を隅々まで歩き回りながら、島民と知り合い、暮らしを知り、可能性や課題、各自の疑問や関心を掘り下げる糸口を掴むためだ。島の墓地とその歴史、亀、水、子供、宗教、島のマイノリティなど、学生の関心・視点は様々あったが、メンバー全員で取り組んだ主な活動は、島のゴミ問題である。

バランロンポをはじめとする島々には、ゴミ回収・処理システムが確立されておらず、日々島に運び込まれる大量の日用品は使用後、ゴミとなり、島内に蓄積されてプラスチック等も含めて焼却されるか、海に投棄されていた。数年前からバランロンポでも、「ゴミ銀行」の活動がはじまっていたが、手間をかけてゴミを集めても買い取られる価格が低いことから、参加世帯は拡がっていなかった。学生たちは、ゴミ銀行の宣伝・普及、小中学校でのゴミ教育、ホームステイ先の世帯でのゴミの種類と量調査、家庭残飯からのコンポスト作り、ペットボトルとコンポストを活用した家庭菜園づくり、島内のゴミ拾いなどを実施した。

以上の他に、島内の主要施設案内看板づくりや、小中学校での日本・インドネシア文化交流、島内のお世話になった方々を招待しての活動発表・日本食パーティなども行った。

サイト活動での発見

愛媛大学　農学部　生物資源学科　森林資源学コース
中西　香穂
Spermondeサイト（平成27年度、平成28年度）

私は平成27年度の海外サービスラーニングにベーシックとして参加した。サイトは５サイト中唯一の海のサイトであるスプルモンデサイトだ。スプルモンデはスラウェシ島マカッサル近郊にある諸島で、その中で私たちの主な活動拠点となったのが、バランロンポ島という島である。私がこのサイトを選んだのは、サイト紹介の際に写真で見た海の美しさと、島のサイトなら魚料理がおいしいだろうという至極単純な食の欲求に従ったためであった。私は食べることが非常に好きで、実際サイト活動の中で日本とインドネシアの食事や調理器具の違いについてとても興味深い発見があった。だが、サイトの期間中一番私の中で印象に残っているのは、島の墓地にあった一風変わった墓のことである。その墓は、一見すると小さな小屋のように見える。屋根からは何本もの木が生え、腰の位置にある窓からは、中に二つの墓石が並んでいるのが見えた。聞き込みの結果、墓はかつてこのマカッサル近郊一帯を治めていたボネ王国、その王族の子孫のお墓だということが分かった。煉瓦と卵のみで建てられたこの小屋は、今も近所の人たちが管理をし、信仰を集めているという。インドネシアはイスラム教が盛んなことで有名だが、イスラムは一神教であり、他の神様をあわせて信仰することは珍しい。ご先祖様など日本の土着の神道や神仏一体思想にとても近いものを感じ、日本とインドネシアの思わぬ共通点に驚かされた。

サイト活動を通して、今後の人生において大きい影響を受けたと感じたのは、人とのコミュニケーションの重要さや難しさだった。言語も文化も違う人との交流は、意思疎通の難しさやもどかしさを嫌というほど感じたが、同時に、誰かと何かをする時、親しくなることの重要性、なにより「自分が相手を理解し、相手に自分を理解してもらう喜び」というコミュニケーションの最も根底にある意義を発見できたように思う。

立場について

高知大学　農学部　農学科　国際支援コース
北山みな美
Spermondeサイト（平成26年度、平成27年度）

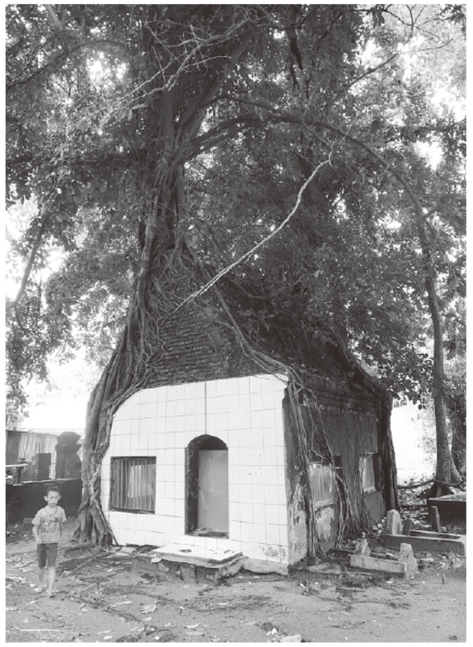
私はインドネシア・スプルモンデサイト・バランロンポ島でのSUIJI海外SLに参加した。参加した動機は、自分自身の変化や、滞在したサイト自身の変化を二度参加することで感じたいと思ったからだ。滞在したバランロンポ島で一番印象に残っているのは、島が抱えるゴミ問題での活動を通して様々な「立場」の人と関われたことだ。ゴミを捨てる人、拾う人、再利用する人、または再利用したいと考えている人、ゴミによって悪影響を受けている人などその立場は様々だが、その人たちと外部から来た「立場」である私たちとで共通した意識や目標を持つことの難しさをとても痛感した。そして、重要なのは、外部の立場だからこそ気づけることを、どこまで島の人たちの立場になって考え、それを活動に起こすことができるかなのだ、ということを学んだ。それが、SUIJIの目標である「地域にまみれる」ことであり、その地域の「変化」に繋がるのだと思う。SUIJI-SLPを通したこの経験や学びを今後活かすためにも、この活動で関わった地域が何か大事な「変化」を起こすための手助けをこの活動外でもしていきたいと考えている。SUIJI-SJPを振り返って、自分がその地域に貢献できたかは分からないが、何か小さな変化を起こすことができたなら、その小さな変化が大きな変化になって地域貢献・問題解決に繋がればよいと思う。

定期船が発着するバランロンポ島の桟橋

島の女性

道脇で干されているナマコ

島への移動でお世話になった伝統帆船チンタ・ラウト号


島の中央にある王族の古い墓

環境美化を呼びかける看板づくり

活動計画を話し合う

島中央の墓地横に集められたゴミ

島の子供たちとコンポストづくり

小学校で日・イ文化交流

海洋研究者のモカ先生と夕日をみる

成果報告会にて島での学びを寸劇で披露

マカッサルの伝統衣装とポーズ

マカッサル海峡の海で